



聖路加 チャペルニュース



礼拝・メディテーション

- 日曜日 ■ 10:30 聖餐式・説教 聖ルカ礼拝堂 ■ 17:00 夕の礼拝 トイスラー記念ホール
月～金 ■ 8:30 朝の礼拝 トイスラー記念ホール（水曜日は聖餐式）
水曜日 ■ 13:00 聖ルカ礼拝 聖ルカ礼拝堂
木曜日 ■ 7:00 聖路加メディテーション（キリスト教的座禅） 聖ルカ礼拝堂前ロビー

聖書を読む会

- 第1・第3木曜日
■ 10:00 新約聖書(成司祭)(対面+Zoom)
第2・第4火曜日
■ 17:30 旧約聖書(関司祭)(Zoom)

チャプレンメッセージ

諸聖徒日 諸魂日に想う

チャプレンメッセージ

諸聖徒日 諸魂日に想う

11月には諸聖徒及び諸魂日と続き、すでに地上での信仰の歩みを終えられたすべての神のもとに召された聖人をしてすべての主を信じてその生を全うされた方がたのことを憶えて、記念する月であります。各教会でもそれぞれそれぞれの教会で信仰生活を送り、親しい交わりのうちにあって逝去された方がたが眠る教会墓地などでその生涯を思い起し記憶して祈りを共にされたことと思います。中世ヨーロッパ社会、人々は死の現実を忘れて日々の生活を享受しているかのようでした。そこへ疫病の蔓延は多くの人びとを死の恐怖と悲しみの底に沈めることになりました。人間は死ぬという圧倒的な現実の前に立たされることになりました。そして、メメント・モリ（死を憶えよ・記憶せよ）という警告が人々の前に知らされることになりました。死を忘れて生きることの軽薄さをこの言葉は私たちに突きつけて来ます。私たちの生には限りがあること。

死はその現実を私たちにあらあらしくも突きつけて来ています。それゆえ旧約のコヘレト（伝道者）は人生を「空の空 空の空、一切は空である」（伝 1:2）と語るとともに、「若き日に、あなたの造り主を心に刻め。災いの日々がやって来て、“私には喜びがない”と言うよわいに 近づかないうちに・・・」（伝 12:1）と勧めます。コヘレトは虚無主義（ニヒリズム）を語っているのではなく、限られた生をその時まで精一杯生きよと勧めていると言えましょう。異邦人の世界への伝道に力を注いだパウロは神からの恵みをさらに豊かに与えられることを求める中で神から「私の恵みはあなたに十分である」ことを示され、さらに「力は弱さの中で完全に現れる」と語られています（Ⅱコリ 12:9）。このように語るパウロは死の悲しみ寂しさの前に立ち尽くしかねない私たちにその悲しみに立ち向かえる「力は弱さの中で完全に現れるのだ」と語って、墓の前から立ち上がる力 イエスの十字架と復活の命の下で生きる希望と力が与えられることを証しています。11月死者を想う日・新しい希望に抱かれて生き始める私たちでありたいものです。

司祭 バルナバ 関 正勝

聖路加コミュニティの声

あらためて聖路加国際病院の理念を振り返る

トイスラー先生が作られた聖路加国際病院の理念に「キリスト教の愛の心が人の悩みを救うために働く」という一節があります。あくまで私個人の見解ですが、これは、disease（疾病）を science（科学）の力で克服するだけでなく、illness（病気）の状態にある人を早期治療し早期社会復帰させるための働きを意図しているのではないのでしょうか。そのためには、compassionate（慈悲深い・思いやりのある）careが必要であり、このことを故日野原重明先生は「サイエンスとアート」と述べられていたことを思い出します。また、「この愛の力をだれもがすぐわかるように計画」という理念の一節は、病院全体の働きが患者さんにフォーカスして医療を提供するように、組織や業務プロセスを構築することであると考えられます。このよ



うな考えは、「患者中心の医療」と言われていました。

さらに、「生きた有機体がこの病院である」という理念の一節は、病院全体が有機的に協働することを表していると思います。

そして、旧病院においてチャペルがその中心に置かれたことこそ、これらの具現化を示すことに他ならないのではないかと感じます。

このように考えますと、聖路加国際病院の職員に限らず、聖路加コミュニティのすべての人は、病院の働きを通じて、キリスト教精神の具現化を実践していることになるのではないのでしょうか。そしてこの想いを永続するためには、聖路加コミュニティのすべての人がこの理念の具現化のためには何をすべきか、という考えを心に留める姿勢が大切だと思うのです。

私事ですが、この秋に洗礼と堅信を受けました。この機会に、あらためて聖路加国際病院の理念を振り返った時、病院全体がキリスト教の豊かな恵みに包まれた働きをしていることを実感いたしました。

聖路加コミュニティ全体がこのような思いを共有し、実践できるように、これからも尽力してまいりたいと思います。

法人事務局長 渡辺 明良

私とチャペル

入職後、忙しさの合間で再会したチャペル

旧館にチャペルがあることを知ったのは在学中のことでした。チャペルというと幼い頃クリスチャンの両親に連れられて教会に行っていた記憶がよみがえります。そのため、チャペルは私にとってどこか懐かしい存在でした。学生時代は、たまに授業の合間に立ち寄りその静かな空間で昼寝をしていました。入職してからは忙しさに追われ、私の中でチャペルの存在は完全に忘れ去られていましたが、最近になって、今回の執筆依頼を受け、5～6年振りにチャペルを訪れて驚きました。チャペルは私が在学していた頃から改装され、



より美しい空間に生まれ変わっていました。整列された椅子にかけると、スタンドグラスから差し込む光が綺麗で、どこか心が穏やかになるのを感じました。私自身はクリスチャンではありませんが、静かな時間が流れるその場所で、忙しさの中で忘れていた思考を巡らせることで、心の拠り所の一つとなり得る場所だなと感じました。今後も、時折訪れることで、心をリセットしたいと思います。

浦部 時美（手術室看護師）

>> 次の方への一言

同じ部署で働く同期の川崎由紀奈さんに次回執筆を依頼しました。ユーモアに溢れていて、仕事で落ち込んだことも笑いに変えてくれるのでいつも助かっています。チャペルには縁もゆかりもないとのこと、半ば無理矢理にお願いしてしまいましたが、彼女のワードセンスでこのリレーを盛り上げてくれるはずですよ。

Q&A

Q. クリスマスの起源は何ですか？

A. クリスマスは皆さんご存じの通り、「イエス・キリストの誕生を記念する日」ですが、どうしてキリスト教ではイエスの誕生日として祝うようになったのでしょうか。

古代ローマ（B.C.753-A.D.476、約1200年間）ではミトラ教という宗教が信仰されていて、冬至を境に日が長くなることから、この日をお祝いしていました。日本より緯度の高いヨーロッパの冬の夜はとても長いのです。太陽の光が強まっていくことをミトラ教で祝っていた習慣をキリスト教が吸収し、イエス・キリストの誕生祭を冬至の頃にあたる12月25日に祝うようになったのがクリスマスの起源とされています。

キリスト教は土地の文化風習を上手に取り込んで融合し進化発展していくことが求められています。クリスマスの起源もその一環として理解することができます。

闇につつまれたこの世界に、真の光、神の子として、来られたのがイエス・キリストです。イエス・キリストがこの世に来られたことをお祝いする日がクリスマスなのです。

皆さま、どうぞよいクリスマスをお迎えください。
神様の豊かな祝福がいつもあなたと共にありますように。アーメン

聞いてみたいご質問がありましたら、chapel@luke.ac.jpまで。

チャペルアーカイブ

津田梅子さん 主治医はトイスラー院長

今年7月に偽造防止機能を向上させた新しい紙幣が発行された。5千円の津田さん、1万円の渋沢さん、共に聖路加国際病院とゆかりのある方だった。

津田さんは日本初の女子留学生で、岩倉使節団と共に6歳で渡米、10年間米国で学び、帰国後、女性が自立し社会に役立つためには女子高等教育が必要と考え、困難をのり越え女子英学塾（後の津田塾大学）を立ち上げ女子教育に多大な貢献をされた方である。

7月20日の築地居留地研究会は築地カトリック教会において「新札・津田梅子と築地居留地」をテーマに開かれた。講師は「小説 津田梅子」（新潮社）著者のこだまひろこ氏だった。

こだまさんは梅子先生とご縁が深い聖路加国際病院の礼拝堂で祈りを捧げたいとして礼拝に出席して下さったことがある。こだまさんの調査によると津田梅子

さんは聖公会信徒で主治医はトイスラー院長だった。講演会終了後、参加者とともに再度チャペルを訪れ祈りが捧げられた。感染対策中なのにグループによる見学を許可してくれた学校法人聖路加国際大学に感謝したい。

1万円札の渋沢栄一氏も関係が深く関東大震災で壊滅した病院を再建するための財界主要メンバーであった。再建資金には天皇陛下からの御下賜金も届けられている。なお、オルガニスト小野田良子さんの母方の親戚でもある。

キリスト教の愛を医療の現場で具体化することを使命としている聖路加。そのチャペルには数多くの祈りが刻み込まれている。大切にしたい。人間なので欠点が多い自分を含めて他者も自然も愛おしいと思いながら信仰生活を続けていきたい。トイスラー先生が病院資金集めの片腕だったポール・ラッシュに贈った「最善を尽くせ、一流たれ、神のために」の言葉が印象に残っている。

アッシジのフランシス

山口 喜義



チャプレン室便り

クリスマスが近づいてきました。
御子イエス・キリストのご降誕により、希望の光である神様の愛が現れました。

二千年以上前に、一人の赤ちゃんが寒くて暗い夜、みずばらしい家畜小屋の中で生まれ、「神は我を救いたもう」を意味する「イエス」という名前がつけられました。暗闇の中、神様の救いの光を現す、神様の赦しと慈しみを人間一人一人にもたらず御子としてお生まれになったのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」
(ヨハネ3：16)

今も共にいてくださる神様の愛の光が皆さまを包んでくださることを心からお祈り申し上げます。ぜひ一緒にクリスマスをお祝いしましょう。

■ アドヴェント・オルガンのご案内

クリスマス待ちを待つアドヴェント（降臨節）の期間、学校法人聖路加国際大学オルガニスト高橋博子さんによるパイプオルガン演奏とチャプレン達によるメッセージをお贈りします。

12月6日（金）10：00

12月16日（月）12：30

12月19日（木）13：00 / 16：00

※各回30分 ※すべて聖ルカ礼拝堂にて行われます。

■ クリスマス前後の主な礼拝のご案内

12月24日（火） 8：30 朝の礼拝 トイスラー記念ホール
16：30 キャロル奉唱 聖ルカ礼拝堂
17：00 イブ礼拝 聖ルカ礼拝堂
21：30 聖餐式 聖ルカ礼拝堂
12月25日（水） 8：30 聖餐式 トイスラー記念ホール
10：30 聖餐式 聖ルカ礼拝堂
12月29日（日）10：30 聖餐式 聖ルカ礼拝堂
1月1日（水）10：30 聖餐式 聖ルカ礼拝堂